
魔女？いいえ錬金術師です

東風になりきれない春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女？いいえ錬金術師です

【Nコード】

N0301Y

【作者名】

東風になりきれない春

【あらすじ】

森の奥で医者 of 真似事をしているエレオノーラは、元日本人。トリップしてから10年たつて、もうとつくに帰還はあきらめてるけど平凡に暮らしたいんです！
なのに、フラグっぽい出会いがエレオノーラの日常を変えていく。

平凡女がチートになった訳

ただ呆然と無為に時間をすごした。

ただひたすら悲嘆にくれた。

ただ闇雲に世界を呪った。

けれど現実は何にひとつ変わらなかった。

気づけば、私が科学と歴史の積み重ねによって平穩を享受していた世界から、魔法と戦乱のうずまく世界へ堕ちて10年の歳月がすぎていた。

畏にかかった野兎の血抜きをしながら、エレオノーラはぼんやりとこの世界に來たときのことを思い出していた。

ただ自宅で眠って、目が覚めたら所在地が大森林に様変わり。

空を見上げれば太陽のような輝く恒星が2つ同時に沈んでいき、すぐに反対側から月のような蒼い恒星が2つ昇ってきた。

20代半ばとしては少々痛いオタクな知識があったので、いわゆる異世界トリップをしたのだという結論に至るのは早かったが、馴染むのはまた別の問題だった。

まず最初に困ったのは食事だった。

だれかに助けを求めようにも、歩けど歩けど人っ子一人見当たらない森。

食べていいのか判断に迷う雑草やキノコや木の実。もちろん毒にあ

たつては堪らないので口に入れなかった。

時折見かける小さな泉と小川は一見きれいに見えたが、現代日本人の胃腸が生水を受け入れるか不安があつたので飲めなかった。

衣食住が確保されてない状況で病気になる原因は極力避けなければならぬ。

かといって、飲まず食わずでは生きていられない。

2日と半日がエレオノーラの限界だった。

どうせ餓死するのなら・・・と、目の前にあつた椎茸によく似たキノコをむさぼるように食べた。ついで、その隣に生えていたヨモギのような雑草も、そのまま口の中へ。

結果、見事に毒を引いたのか、胃腸が軟弱だったのか・・・丸一日腹痛に苦しむことになった。

そんなことを繰り返しているうちにサバイバル生活に慣れた精神は、ようやく出来た余裕からか簡単にぐらつくようになった。

白昼夢は当たり前。

蒼い見慣れない月に照らされて、悪夢に飛び起きることも当たり前。ふとした拍子に涙が止まらなくなることもあった。

そして・・・キレた。

「私がなにをしたっていうの！？なんで私なの！？私は・・・私が・・・っ！！かえしてえええ！かえしてよおおおおお！！！！」

慟哭。

「あゝ あゝ ああああああああああああああああああああ
あ」

地面にこぶしを打ち付け、空を見上げて咆哮した。

見開いた目から涙がこぼれた。

そのときのエレオノーラは理性のたがが完全に外れた状態だった。自己の認識もなにもなく、ただ丸裸な精神体が世界に晒された。

放り出された精神体は世界をありのままに俯瞰し、理解し、分析し、エレオノーラの中に戻った。

血抜きが終わった野兎を棒に手際よく縛りつけながら、エレオノーラは回想から帰還した。

「思えばあれって、某鋼の兄弟が見た真理の扉を開けたのと同じ作用よねえ。代償もとられたしさ」
ため息とともにつぶやく。

精神体が肉体を離れて世界を視る　それが異世界人ゆえに可能だったのかはわからないが、それ以降エレオノーラの認識する世界は劇的に変わった。

世界に魔法が満ちていることを理解した。

世界に嘆きと憎しみと癒しと憐みと混乱が生まれていることを把握した。

満ちた魔法を分析し、己の技術にした。

混乱から生き延びるために、魔法だけでなく元の世界の技術も分析した。

魔法と科学が決して反発しないことを実験して確証した。

魔法による事象を分解、科学によって再構築する錬成技法を創り出した。

その技術で森を突破し、町や村を発見して、最低限の衣食住を確保

するために薬を錬成して医者 of 真似事を始めた。

チートk t k r ! と浮かれていたのは最初の数年間だけ。

そのうち人々に遠巻きにされるようになった。

理由は自分でもすぐにわかった。

外見が変わらないのだ。

トリップしてから数年たてば、20代半ばから30代になる。化粧水もない。アンチエイジングの観念もない世界でなら、当然老化現象は免れない。

そのはずなのに、さらに数年たってもエレオノーラの姿かたちは変わらなかった。

一度も染めたことがないマツシユボブカットの髪。

化粧をするときつめに見えるけれど、ノーメイクだとやや童顔な顔立ち。

モデル体型ではないけれど、それなりに満足している肉体。

身長も平均からはずれているわけではない、どこにでもいる平凡な女は不老になっていた。

そのころには元の世界に帰る方法をやりつくして、全敗したエレオノーラはすっかりこの世界に骨を埋める気まんまんだったので途方に暮れた。

もう一度発狂して精神を飛ばせば、新たな真理を見ることができるかもしれないが、そんなことは気軽にできるものじゃない。

仕方なく今まで使っていた日本名を捨て、新しくこの世界に生を受けたのだと開き直すことにした。

名前は故郷の恒星から気に入った語感で、エレオノーラと名付けた。日本人ののつぺり顔でエレオノーラの名は違和感があったが、そんな祖語は異世界を知らない人間にはわかるまい。

その日からエレオノーラとして人生は始まったのだ。

「等価交換の代償は肉体の平凡・・・とか、真理の考えることはわからんわ」

もくもくと住処へと戻りながら、エレオノーラはまだ一人ごちていた。

森に家を錬成したときは、薬草採集に便利だったからだ。

それが今では人々の奇異の目から逃れるために理由が変わっている。独り過ごすうちに、独り言が多くなってしまうのが少し悲しいと思っているが、どうしようもなかった。

人から遠巻きにされながら町や村で生活できるほど、エレオノーラの精神は強くなかった。

「現代っことは豆腐メンタルうゝ。でも薬の売れ行きはいいから負けない・・・うん」

そんなエレオノーラのことを、近隣の人々は『蒼の森の魔女』と呼ぶ

選択できないフラグ回収

最初はボロきれが転がっていると思った。

エレオノーラがいつものように食料と薬草を狩っていると、しげみの中に黒ずんだ布に包まれた何かが見えた。

近づいてみると、つんと鼻の奥を鉄さびた匂いが貫く。

よくよく見ると、血まみれのマントにくるまった人間のようなだった。かすかに上下するところから、まだかるうじて生きているらしい。

「え、なにこのフラグっぽいものは？」

豆腐メンタルを自覚するエレオノーラにとって、やっかいことは避けて逃げて見ぬふりをするものだ。

だというのに、目の前には訳ありそうな生死の境をさまよう不審者。この状況で放置すると確実に死ぬだろう。

翌朝にはそのあたりの獣のおいしいご飯になっているに違いない。

それはそれで後味が悪いと、切り捨てられない。

甘いとわかっていても、道徳観念はそうそう変わらない。

仕方なくエレオノーラはそっと近づいてボロきれ同然の人間に手のひらをかざした。

「スペクタクルズ」

イメージするだけで発動する魔法だが、言葉にしたほうが簡単なので囁くように唱えた。

元ネタはもちろんゲームから。

作用は対象者の状態を、ゲームのステータス画面のように知覚できること。

そのなかには対象者の名前も入っている。

わりとプライバシーを無視した魔法なので、診療以外では使わないようにしていた。

脳裏に浮かびあがった情報を分析する。

「ふむ。10代前半の男で・・・腹部からの出血多量で意識不明の重体つと。視覚がやられているっぽいのは、目をえぐられたか、切られたか・・・って、えぐいえぐい。えーと。それから全身打撲と肋骨の骨折。足も折れてるのか。どうやってここまで来たんだか」

考えられるのは罪人が奴隷が逃亡の果てに行き倒れたか、不幸にも何者かに拉致され暴行のうえ捨てられたか。

「可能性が高いのは足の骨折からして、後者。やっぱり訳ありっぽいよねえ・・・でも・・・仕方ないよねえ」

エレオノーラは腰にさげた袋から液体瓶を3本取り出した。

1本目の無色透明な液体瓶“ホーリイボトル”の中身を適当に地面にまく。

獣や悪意ある魔法を退ける効果がある。

周囲の安全を確保してから、2本目の薄い青色をした液体が入った瓶“エリクシール”のふたを取り、少年に近づいた。

傷に響かないよう細心の注意を払って、マントを剥ぐと赤茶けた鉄色の血に染まった顔が見えた。

先ほどスベクタクルズで見た通り、まぶたが落ちくぼんで、本来そこにある眼球が抉り取られたのがわかる。

あまりのスプラッタな光景にくらくらしながらも、エレオノーラは少年の口元に瓶のふちをあてがった。

「これ高価なんだから、ちゃんと漏らさず飲みなさいよ。聞こえてないと思うけど」

様子を見ながら、少しずつ液体を流し込むと反射で吐き出す力もないのか、“エリクシール”は少年の咽喉を通ってすんなり体の中へ入っていった。

飲み干させたあと、しばらくすると少年のまぶたがけいれんし始めた。

状態異常の無効化、体力の全回復が“エリクシール”の効果だ。その中には肉体の欠損も含まれている。

おそらく急激に少年の眼球が再形成されているはずだ。同時に骨折や傷も癒えていつているはず。

・・・そんなスプラッタ見えないけど。見たくないけど。

やがて容体が落ち着いたのか、呼吸が一定になった少年に最後の瓶の中身を飲ませた。

内容は眠り薬だ。

こちらは改良中で、まだ名前は決まっていない。

ここ下手に意識を取り戻されるより、家に連れ帰ってきちんと清潔な状態にしたい。

眠っていてもらった方が好都合だった。

エレオノーラの魔法と錬成は、ゲームや漫画をもとにイメージして具現化するため、不可能を可能にする。

ゲームなんだから傷を負ってもHPが回復して傷が治るのは当たり前なのだ。

ただ、これがこの世界にとっても異常だというのはエレオノーラだつて理解していた。

だから普段の医療行為や薬には使っていない。

創り出したのだって、技術の向上のためだ。使う予定はなかった。

「ほんとに何のフラグかってくらい、予定調和のように薬を消費す

るなんて。魔法で治してもよかったけど、それだと元々のからだの回復力が落ちるしさあ」

医学の発達していない世界で免疫力の低下は生存率の低下だ。免疫力を低下させずに、瀕死の人間を救うにはエレオノーラの薬を使うしかなかった。

あとでどうやって治したのか問われるだろうけど。

ため息をかくせない。

それでもやっぱり見捨てるより、今のほうが自分の精神的に楽なのは確かだったので、エレオノーラは現状を受け入れることにした。

少年を浮遊魔法で数メートル浮かせ、そのまま自分を追尾させて帰宅する。

ソファ代わりの大きなクッションの上に寝かせると、狩りの獲物を炊事場へ運んだ。

薬草類はまとめて籠に入れ、あとで干すことにする。

クッションに血がつくだろуг、これはあとで洗えばいい。

ひとまずやらねばならないことは、昼餉のための食事作りだ。目を覚ました少年用の病人食も作らねばならないだろう。

「病人食っておかゆでいいよねえ？ 雑穀茹でて、薬草と薄味調味料でいいっしょ。無理そうなら薬草スープとか？」

鍋の中身をぐるぐるかき回しながら、エレオノーラは滋養にいい薬草を思い浮かべた。

「それにしても・・・少年の名前って・・・」

“スペクタクルズ”で視た情報を思い出す。

キールⅡフォントⅡクレセントⅡデューク。

名字があるのは貴族の証拠。

フォンがつくのは王族にすらなる一族。そのなかでもフォントは王弟や王妃の直系一族にのみ許された称号。

そしてデュークは公爵位をあらわす。

この世界を分析したときの知識を引っ張り出すと、この少年は王族関係者のクレセント公爵の当主様ということになる。

さすがにどこの国の公爵様かまではわからないが、少なくともこんな辺境の森で転がっていていい人間ではない。

「精神年齢30超えたおばさんには、このフラグは辛いわぁ」

エレオノーラは遠い目をしながら、完成したスープを椀に盛り付けた。

ルートは進むよ、どこまでも

エレオノーラが昼餉を終えて、薬草の陰干しをしている最中に少年は目覚めた。

しかし呆然と天井を見上げたまま動かない。

エレオノーラは薬草を干す手を止めて、少年に近寄った。
側に座り込んで顔をのぞきこむ。

「少年、少年。生きてるんだから呼吸くらいちゃんとしなさいよ」

少年が公爵だとわかっていたが、それは反則的な方法で知った知識なので何も知らない女のふりをして話しかける。

少年はエレオノーラを濃い緑の瞳にうつすと、ぼんやりとした口調で尋ねた。

「いきて・・・いるのか」

死者がこんなにしやべったらホラー以外のなにものでもない。

「生きてる生きてる。森に行き倒れてたけど、死んでない」

正確には死にかけてたけど。

それは言わないエレオノーラだった。

少年はようやく視点をむすんだ目で、エレオノーラをじっと見つめた。

そしてポロリと涙をこぼした。

エレオノーラがぎょっと目を見開くと、少年もまた動揺したように

目をまたいた。

自分でも泣くとは思っていなかったような反応だった。

エレオノーラは元の世界で男が泣く場面を見たことがある。

小さいころなら、くだらないことで沢山。

おとなになつてからは、恋愛がらみや仕事がらみでの苦い涙を。

けれど、こんな明らかに暴行を受けた後の安堵したときの涙など知らない。

どう対応したものかと思いながら、出来る限り優しい声で話しかけた。

「何があつたか知らないけどさ。とりあえずここにはあんたを傷つけるものはない。その代わり温かいスープがある。食べられそうなら持つてくるよ」

少年はかすかにうなずいた。

“エリクシール”で体力が全快しているといっても、精神的な消耗が激しいのだろう。

あまり大きな動作はできない様子だった。

エレオノーラが持つてきた薬草スープを、少年はなんとか身を起こして自力で飲み干した。

人心地ついたのか、こちらをちらりと見て思案している。

エレオノーラは知らぬふりをして、薬草を干す作業に戻っていた。

「すまない、女史。君は医者か？」

作業が終わるのを待っていたのか、エレオノーラがからになった籠

を置いたときに少年は尋ねてきた。

エレオノーラは少し考えてから、少しだけ正直に話すことにした。特に身分を偽る必要はない。

不老不死ではあるけれど、最近は用心して顔をさらさずに近隣で医療活動を行っているし。

正体不明の魔法医がいる、という噂にはなっているようだが。

「私はエレオノーラ。薬草を中心にしてるけど、魔法もちょっと使う医者みたいなもんよ」

「魔法を？都で学んだのか？」

「いや、独学。まあ薬草の知識もそうだけだね。だからたいしたことではないけど、森で行き倒れてるヤツを拾うくらいはできるってわけ。で、あんたは？」

逆に問い返すと、とたんに少年の口が重くなった。

そりゃそうだ、とエレオノーラは内心うなずいていた。

そしてそのまま身分を偽ってくればベターである。暴行された公爵とのかかわりなんて、やっかいごとの匂いしかない。

「私は・・・私は」

少年はひとつ息をついた。

「私の名を明かす前に、訊きたいことがある」

エレオノーラは続きをうながすように、首をかしげてみせた。

「私はほとんど死にかけていたはずだ。いや、死んだと思った。だが生きている。これは独学でたどりつく救命の技術なのか？」

はい、予想どおりk t k r！

この質問は助けるときに覚悟していたものだ。

だから一応対処も考えている。騙されてくれるかは分からないが、本当のことを言うつもりはなかった。

「私が持ってた薬をぜんぶ飲ませたのよ。わりと重体っばかったから、今までの対応じゃ助からないと思ってダメでもともと。運が良ければ助かる、くらいの感じでね」

「では、私が生き延びたのは偶然だと？」

「偶然なのか、あんたの生命力が強かったのか。それはわかんない」
「視力が回復するほどの生命力があるとは思えないんだが」

矢継ぎ早に詰問される。

これはもう尋問だ。

だが、やつかいごとを抱える公爵様にとっては不審者かどうか見分ける重要なことなのだろう。

「視力が回復するとかよくわかんない。もともと見えてたんじゃないの？」

「いや、短剣でえぐりとられた」

「・・・あ、そうなんだ。うん、なんか痛そうだけどさ。それって幻覚の魔法とかじゃないの？」

「幻覚？痛みのある幻覚・・・」

少年は考え込むように視線を下げた。

「そのような魔法は聞いたことがないが、エレオノーラ女史には心当たりがあるか？」

自分の名前の呼び方に背筋がかゆくなった。

そんな高尚な呼びかけされたことないから仕方ない。

「んー。知ってる魔法が少ししかないから、よくわからないけど。魔法は想像力が大切っていうのはわかる。だから、なんでもありませんじゃないかなーと」

「そうか・・・」

実際なんでもありだ。

それを持って知っているエレオノーラの言葉には妙な説得力があった。

少年は深呼吸を一度すると、まっすぐにエレオノーラの目を見た。

「まだわからないこともあるが、あなたに助けられたのは確かなようだ。あらためて礼を言う。私はキールだ」

偽名ではないが、名字を名乗らなかったことにエレオノーラはほっと安堵した。

ぎりぎりセーフ！

今ならまだこのやつかいごとの塊のような御仁にそのままお帰り願える。

「キールね。からだの傷は治ったようだけど、どこか異常はある？」

なんちゃって医者として、一応体調を訊いておいた。

「いや、疲れているが特に問題はないようだ。ただこの薬草の匂いは・・・」

気まずそうにキール少年が後方に干されている薬草の束を見た。

慣れない人に薬草類の匂いはきつい。

エレオノーラも最初はなんの拷問かと思ったが、今では慣れている。

「ああ・・・まあこの匂いは諦めてよ。医者の家なんてこんなもんだって」

へらりと笑いかけると、キール少年は「そんなものか」と呟いてうなずいた。

そして話し疲れたのか、クッションに沈み込むように頭をもたせかけた。

エレオノーラとしては、気力が回復次第出ていつてもらいたいが、キール少年は思ったよりも消耗しているようだ。

これが大のおとななら問答無用でたたき出すが、子どもにそんな真似はできない。

たとえこの世界ではすでにおとなと認められる年齢に達していようと、12〜13歳くらいの見た目が元の世界の感覚では子どもだと認識してしまう。

子どもは守られるものだ。

子どもは愛されるものだ。

子どもはそうして育まれるものだ。

エレオノーラの元の世界の家庭環境はよいとは言えなかったからこそ、子どもには幸せであって欲しいという思いがある。

義務で保護されるのではなく。

義務で仮初の世間体をつくられるのではなく。

きちんと愛されるべきだと。

昔を思い出して感傷にひたりかけたが、エレオノーラは強制的に現実を意識に戻した。

どつやらキール少年をしばらく面倒見ることは確実になりそうだった。

好感度はMAX近いですか？

少年の面倒を見る期間なんて数週間ありや充分でしょー。
なんて思ってた時期が私にもありました。
人生なんてままならない！

森の小道をはちみつ色の髪をゆらしながら、少年が駆けてくる。
玄関で待つ私の前まで来ると、実にうれしそうに笑った。

「ただいま、エル！」

「はいはい、おかえりキール」

緑の瞳に見つめられると、状況に流されてもややもした気持ちが吹っ飛んでいった。

キール少年は実にかわいく綺麗に育ち、いまや立派な美青年である。

キール少年を保護したあと、彼の回復を待つて最寄りの町へ送り出すまでは順調だった。

滋養によいものを食べさせ、ストレスを緩和させるために森林浴に繰り出し、マイナスイオンのなかりハビリを同時進行。

すっかり気力が回復するころには、彼は私を「エル」と呼ぶようになっていた。

まあ、エレオノーラ女史なんて呼び方が気恥ずかしかったので、変えてくれるように頼んだのは私だ。

なぜか愛称になってしまったが、許容範囲である。

そして回復後、別れのときにやけにキール少年と一緒に来ないかと勧誘された。

いわく、私の持つ技術は都でも通用するすばらしいものである。いわく、きちんとお礼もしていないので、実家に来てほしい。いわく・・・とにかく、さまざまな理由で引き留められた。

懐かれるようなことをした覚えはないけれど、悪い気はしない。かといって、森を離れて不老不死の異端女が人の多い都へ行く気にはなれなかった。

どう考えても死亡フラグですありがとうございます。

そこで妥協案として、たまになら遊びに来てもいいということにしたのだ。

不承不承ながらキール少年は受諾した。

私としては、キール少年はやっかいごとを抱えた公爵様なので向こう何年も事後処理に追われるだろうし、その間にこんな女のことなど忘れてしまふだろうという思惑もあった。

けれど蓋を開けてみると、キール少年は半年後に再びやってきた。一度通っただけの我が家への道を、森の中迷わずにたどり着くとか・・・どんだけチート脳なんだ！

約束は約束なので、遊びに来たキール少年と数日一緒にいた。

私自身の生活サイクルは変わることなく、午前中は森へ薬草とその日の糧を狩りに。

午後からは薬の調合か、魔法込みの錬金を作業部屋で行う。

作業部屋には一抱え以上ある壺のような形の錬金釜を設置していて、そこに材料と魔力を注いでエレオノーラ印の液体薬の完成だ。

夜は特にすることはなく、町で買った本を読むくらい。

キール少年はその行動に雛鳥よろしくついてまわった。

最初は邪魔だなあ、とか。

やっぱり怪しいから監視されてるのかなあ、とか思っていたが、彼の瞳には純粹に興味と好意の色しか見いだせなかった。

今度彼がやってきたのは、さらに半年後だった。

このときは一週間ほど滞在したが、前と変わらず私の後についてまわった。

話すことはとりとめもないものばかり。

都や街で流行っているものが、村や町にもそのうち来るだろうから、先に手に入れておいた方がいいだとか。

そう言つて小粒の宝石がついたストラップのようなものを渡された。

プレゼントというよりも、お土産の感じだろうか。

その半年後も、さらにその半年後もキール少年は何かしら持つて遊びにやってきた。

そして気づけば5年の月日が流れていた。

最近キール少年・・・いや、もう18歳の人を少年とは呼べない。貴族の成人は13歳からなので、いやでもおとなのなかで揉まれて成長したのだろう。

元の世界の20代よりもしつかりしていた。

そんなキールは滞在するときは2週間くらい余裕でいる。

公爵なのに仕事は大丈夫なのかと思ったが、エレオノーラの知っていることではないので黙っておいた。

どのみち、そろそろ会うのが難しくなるだろう。

私は不老不死だから。

老いない見た目をごまかすにも限度がある。限界は近かった。

「んで、今回は何日くらいいるの？」

昼餉の支度をしながらキールに尋ねると、彼は居間に置いた大きめのクッションを抱えながら答えた。

「そうだな。今回は1週間ほどか」

「あれ？短い」

びつくりして野菜を刻む手を止めた。

振り返ると不機嫌そうな緑の瞳とかち合う。

「仕事が増えたんだ。なんとかこの時期は融通をきかせているが、それでも厳しいな」

そこまでして来ることないと思う。

心の中で淡白なことを考えながら、キールの仕事が増えたという言葉がひっかった。

嫌な予感しかない。

「キールの仕事がかか知らないけどさ。会ったときみたいに大怪我するようなことはやめてよお？」

冗談めかして軽く注意すると、キールは神妙にうなずいた。
生真面目な反応にため息が漏れる。

貴族社会は清濁あわせ飲まねばやっていけないと思うのだ。

そのあたりは元の世界の政治家と同じだと考えている。

だからこんなにもバカ正直で真面目一直線で、清廉潔白を地でいくキールには辛いことの方が多いだろう。

いらぬ恨みも買っついていそうだ。

それらを早く帰って処理しなければならぬ状況が待っているのだろう。

だというのに……。

「キール……そんなに忙しいなら余裕のあるとき以外仕事優先したほうがいいんじゃない？」

「いや、半年に一度はここに来ると決めている」

なんでやねん。

反射的にツツコミそうになった。

なんと返したものと悩んでいると、キールが小さな声で言った。

「迷惑か？」

キールは公爵という立場からか、あまり不安そうな様子や自信のない表情はしない。

出会った当初、思わずといった形で流れた涙くらいだ。

そのキールが心もとなげに訊いてくるなんて、どれだけ懐かれたのだろう。

「迷惑じゃないよ。ただあとでキールが困る状態になるくらいなら、思っただけ」

「困らない。大丈夫だ」

キールの反応は即答でした。

うむ。かなり好かれてるよ私。

でもきつとこの再会が最後。私はまた別の場所へ行つて、キールは公爵として生きていく。

そうでなければ、私の異常がバレてしまう。

人間は異端を畏怖し、排除する。

元の世界の魔女狩りのように、私を排除する動きがないと言い切れない。

一か所にとどまりつつけるのはリスクが高すぎる。

なにより異常を受け入れられるかどうか、キールのことをそこまで信頼できていない。

信用はしていても、それだけだ。

お互い肝心なこととは言わず、秘密を抱えているのだから、どうしても信頼へ踏み切れない。

ほんと人生ままならない！

1／4話 キール視点

兄上が死んだ。

それまでキールにとって公爵当主という地位は兄上のもので、自分とは関係のない別次元の話だと思っていた。

次男ということで、それなりに教育を受けていたが、兄の優秀さには比べるまでもなかったのだ。

誰が見ても次期当主にふさわしいのは兄上。

父上も、叔父の国王陛下も兄上に目をかけていらっしやった。

そのことを羨ましいと思ったことはない。

むしろその陰で努力し、ときに無力を嘆く兄を見ていたキールには当主の地位など魅力的ではなかった。

むしろ公爵当主の重圧に耐える兄を誇らしいと思った。

私の唯一の直臣であるギルベールも大いに同意してくれた。

彼は子爵家の次男で、同様に兄たちの苦勞を見てきたらしい。

そんな自慢の兄上が騎馬一騎打ちの模擬試合中に落馬して亡くなった。

魔法でも剣でも優秀な兄上が落馬という事故。

ありえない事態に父上たちは騒然とした。そして故意による陰謀ではないかと、貴族間で疑心暗鬼の状態に陥った。

私はいやおうなく次期当主として担ぎ上げられた。

事故であれ故意であれ、次代の不在は公爵の力を削ぐ。

お飾りでもないよりはマシだという感情を隠すことなく、父上は私に次期当主を命じた。

それから1か月。

兄上の喪が明けきらぬうちに、ことは起こった。

屋敷が炎に包まれていた。

侍女の甲高い悲鳴と、屋敷仕えの護衛騎士たちの怒号。

ギルベールが私に逃げるように叫んでいる。彼の足は落ちてきた梁に潰されていた。

父上の姿は見えない。

いや、この混乱した状況では誰が生きているのかさえ確認できなかった。

呆然と何故こうなったのかわからないまま、キールは座り込んだ。

ギルベールの言うように、炎に巻かれないうちに逃げなければならぬのはわかつている。

けれど父上はどうする？

この事態の収拾は？

どうすれば最善なのかわからない。

ギルベールが鋭い声を発した。

その瞬間、突如後頭部に鈍い痛みが走り、私の視界は暗転した。

覚醒と気絶のはざまをさまよっていた気がする。

からだを打ち付ける暴力と、目を焼く痛み。

ただ嬲られるまま、抵抗することもできずにすべての痛覚を受け入れるしかなかった。

いつそ死にたいとすら思ったが、その自由さえなかった。

次に意識が戻ったとき、ついに自分は死んだのだと思った。

やわらかいものに包まれ、暖かい空間で寝ていたのだ。

それまでの地獄とは雲泥の差だった。

おまけに体中に走る痛みもない。

不意に視界のなかに女の顔が映った。

「少年、少年。生きてるんだから呼吸くらいちゃんとしなさいよ」
明るい口調で黒髪の女は言った。

からからに乾いた口内をなんとか動かして、キールは信じられない
気持ちでつぶやいた。

「いきて・・・いるのか」

「生きてる生きてる。森に行き倒れてたけど、死んでない」

打てば響くように肯定された。

生きている。

痛くない。

もうあの地獄の中じゃない。

気づけばキールの瞳から涙がこぼれた。

安堵したのか、これまでを嘆いたのか自身でもわからない涙だった。

女が驚いたような顔をして、ついで視線をさまよわせた。

けれどやがてこちらをしつかり見つめて、落ち着いた声で語りかけてきた。

「何があつたか知らないけどさ。とりあえずここにはあんたを傷つけるものはない。その代わり温かいスープがある。食べられそうなら持つてくるよ」

キールはその言葉に偽りを感じなかった。

微笑みの下での貴族同士の騙し合いや、最近までの暴力の嵐を思えば、目の前の女は無害にしか見えなかった。

その後、念のために矢継ぎ早に質問したけれど、女は特にあやしい素振りもなく答えてみせた。

キールが助かつたくだりは疑問が残るが、彼女に救われたことにかわりはない。

感謝こそすれ、これ以上疑う気にはなれなかった。

それからキールは1週間と少し女 エレオノーラの家で療養することになった。

そのあいだ、ふと尋ねてみたことがある。
なぜ自分を助けたのかと。

エレオノーラは当たり前前のことを訊かれた、というように意外そうな表情をした。

「子どもは守られるもの、守るもの！」
きつぱりとした発言に驚いた。

平民なら15歳、貴族なら13歳には成人と見なされる。

今年13歳となったキールも成人の儀式をすませていたので、すでおとなの対応をされていたのだ。
それがエレオノーラにかかれば、そこらの幼児同然の扱い。

ああ、彼女は私を傷つけない。
ただのキールでいられる。
やっと心からの笑みを浮かべられた。

快復したあと、お礼をしたいからと理由をつけてエレオノーラを都へ誘った。
いまだ炎に巻かれた屋敷のことや、兄上の落馬事故のごたつきで騒がしいとは思ったが、彼女と離れてそれらに対処する気にはなれなかった。

エレオノーラがそばにいれば全て解決するような気さえした。
キール自身もそれはないと思ったし、この短い期間でずいぶん依存しているとも自覚していたが、魔窟そのものの都へひとりで帰るのは堪えた。

そこであれこれと誘い文句を変えてみたが、エレオノーラの返事が一貫して拒否だった。
申し訳なさそうな表情でも、決して首を縦に振らない。
結局キールは時折遊びに来てもいいという約束をとりつけることで妥協した。

これ以上だだをこねて、彼女に嫌われるほうが耐えられなかった。

都へ帰ると、ようよう体を起こせるようになった父が待っていた。あの火事で大怪我をしていたらしい。

ギルベールの姿はなかった。

父は私が生きていたとは思わなかったようで、相当な驚きようだった。

それから5年。

事件を追ううちに、ギルベールが公爵の失脚を狙う組織と通じていたこと。

兄上の落馬事故は組織による工作だったこと。

ギルベールが結局は罪悪感からか組織を裏切ったこと。

ギルベールの裏切りによって、証拠隠滅のために屋敷に放火されたことが判明した。

思い返せば間者を招き入れていた公爵が甘かったのだ。

戻ってすぐ正式に当主になったキールは、二度と裏切り行為が出ないように細心の注意を払って一族を刷新した。

簡単なことではなく、一筋縄ではいかない案件ばかりだったが、くじけそうになるたびにエレオノーラの家を訪ねた。

そして半年に一度は訪問するというルールを自分の中に設けて、それを目安に行動するようにした。

半年で案件を乗り切れればエレオノーラに会える。

半年で乗り切れなければ公爵としての手腕が問われる。

自身を叱咤しながら、5年がすぎた。

気づけば浮いた噂のひとつもないお固い公爵閣下と言われるように

なっていた。

結婚適齢期に入ったからか、見合いの話もあったがすべて多忙を理由に断っているのも一因だろう。

けれどさすがに18歳となった今年。

叔父の国王陛下が開く夜会からは逃れられなかった。

夜会は貴族同士で情報交換したり、将来の結婚相手を見定める社交場である。

業を煮やした父と叔父が共謀して、キールの花嫁候補を送り込んだようだ。

それでもなんとか夜会が始まる前に休暇をとり、エレオノーラの家を訪ねられたのは僥倖というほかない。

もつともいつもより短期間の滞在になつてしまつのは仕方のないことだったが。

「キールの仕事が何か知らないけどさ。会ったときみたいに大怪我するようなことはやめてよお？」

仕事忙しいことをほのめかせば、冗談めかしながらも真摯に心配してくれる彼女の存在がありがたかった。

厨房で野菜を刻む彼女の背に向つて、キールはそつとため息をついた。

「エル・・・ありがとう」

強制イベントはスキップできません

今回キールがお土産に持ち帰ったのは、紫水晶のような宝石をあしらった繊細な髪留めだった。

こちらの世界へ来てから散髪など、自分でそろえるくらいしかしていない。

自然と肩先までだった髪の毛は、腰のあたりまでのびていた。

不老不死といっても、新陳代謝はしているらしい。

そのあたりどうなっているのか、自分の体ながらよくわからない。

ともあれ髪をまとめるものが欲しいと思っていた矢先だったので、エレオノーラはありがたく髪留めを頂戴した。

ゆるく頭頂部の髪だけ編み込んで、後頭部でまとめる。

それだけでずいぶんスッキリした。

「似合ってるよ、エル」

やっぱり雛鳥のように私の後ろで薬づくりを見ているキールが褒めてくれた。

お世辞は苦手だ。

でも心からの賛辞は嬉しい。

エレオノーラは笑った。

「ありがとー。これ気にいっちゃった」

キールは目を細めて機嫌よさそうに口元を緩めた。

その姿は満足げな猫を思わせたが、やっていることはご主人様に認められて嬉しい犬である。

キールに大型犬の耳と尻尾の幻影が見える気がした。

いつものように過ごして3日目の早朝。

エレオノーラが朝餉の支度をしていると、突然外が騒がしくなった。馬の蹄の音が複数近づいてくる。

それまで起きてはいたが、毛布をかぶってクッションを抱きかかえ、ぼーっとまどろんでいたキールが跳ね起きた。その勢いで扉を開けて飛び出していく。

もちろんエレオノーラは追わない。

ここで追うのはフラグ回収したい物語の主人公くらいなものだと、何事もなかったかのようにフライパンもどきの平たい鍋に卵を割り入れた。

町で購入したパンと、村で物々交換したベーコンのような干し肉の塊を切る。

パンは片面だけ焼いて、ベーコンはさつとあぶって。

先ほどつくった目玉焼きを乗せれば簡単な朝餉の出来上がりだ。あとは昨夜の夕餉の残りであるスープがあれば充分だろう。

出来栄えに満足していると、キールが駆け足で戻ってきた。

「エル！怪我人があるんだ！すぐに来てくれ！」

「・・・・・・・・」

それは普通の平民ですか。

いいえ違います。

ですよ。

エレオノーラは心の中でノリツツコミした。

公爵のキールが慌てて助けを求める相手なんて、同じくらいやつかない人間だろう。

しかしエレオノーラはキールの正体を知らないことになっている。
“スペクタクルズ”で調べた結果は、ハッキング行為に等しい。
それを明かすつもりがない限り、エレオノーラは友人のキールの頼みを受け入れるのが自然というものだった。

とりあえず出来たばかりのサンドイッチもどきをキールの口に押し込む。

何かもごもご言っていたが、その間にエレオノーラは診療に必要な道具を揃えに作業部屋へ向かった。

かばんの中にいつも往診の際に持ち歩く薬に加えて、また創った“エリクシール”と新たに“パナシアボトル”を入れておく。

通常使っている薬は町中でも普通に飲用されている程度の効果しかない。

それに対応できるなら構わないが、初対面のときのキールのように瀕死状態だと間に合わない可能性がある。

“エリクシール”は最終手段として置いておき、ひとまず毒・マヒ無効化の効用がある“パナシアボトル”と治癒魔法でなんとかしたいところだ。

準備を終えて居間に戻ると、サンドイッチもどきを無理やり飲みこんだキールが、まだ温めていないスープで残りを胃の中に押しこんでいるところだった。

しかも涙目でむせている。

ちよつと可哀そうな気もしたが、せっかく作った料理を無駄にするのはもったいないので罪悪感はない。

「さて、キール。私の患者さんはどこにいるの？」

キールは何か言いたげにこちらを見たが、気を取り直したのかすぐに身をひるがえした。

「こちらだ。診てほしいのはひとりだ」

「はいはい」

かばんを担ぎ直して、キールの後を追った。

玄関前の少し開けた場所に、3頭の馬がいた。そして騎士のような鎧をまとった男が2人と、乱暴に運ばれてきたのかぐつたりした様子の痩せぎすな男が1人地面に横たわっている。

騎士っぽい男たちがキールに向って膝をついた。

キールはわずらわしそうに手を振って、彼らを立たせた。

「彼は生きているのか？」

「はい。応急処置はしております」

エレオノーラは地面に膝をついて、横たわって真っ青な顔をした男を覗き込んだ。

イケメンだった。

エレオノーラは瞬時に浮かんだ感想に、乾いた笑いをもらした。美形代表のようなキールの周囲にいる人間だから、どうせ美人美女美少女美少年が多いのだらうと妄想していたが、まさか本当にそうだとはいえ。

彼は苦悶にゆがんだ表情でなお美しかった。
むしろ鋭利な美貌に拍車がかかっているような気さえする。

苦しんでいる男には悪いが、瀕死のキールを知っているエレオノーラから見ればまだ余裕がありそうだった。
だからエレオノーラも余裕をもって、男の診療を開始する。

キールや騎士つばい男たちに気取られぬように、無詠唱で“スペクタクルズ”を発動。

男にかざした手のひらを伝って、脳内にステータス画面が開かれる。
もう片方の手で同時に脈をはかりながら、表示された状態異常を羅列した。

「毒を受けてるみたいねえ。あと見ればわかるけど、剣みたいなものでも何度も切られてる。毒つきのナイフか何かでやられたんじゃない？あとはー・・・ふーん。栄養失調みたい。どんな生活してたんだか知らないけど、けっこう体力落ちてるよ」

毒と聞いて、キールが反応した。

「助かるか？」

正直“エリクシール”の出番はない。“パナシアボトル”を使えば一発で治る。

切り傷だって治癒魔法で治せる範囲内だ。

けれど、そこまで切羽詰っていない状況で自身の異能をさらす気はなかった。

「そうねえ。毒消しの薬を使っても3日ほど熱が出ると思うわ。傷からの発熱もあるだろうから、そのへん注意して看病すれば1か月

程度で問題ないはずよ」

普通の医者ができる範囲の治療にとどめることにした。
後遺症が残らないように体力が徐々に自動回復する“リヴァイブ”
の魔法をかけておくのは、少々良心がうずいたからだが。

「とりあえず家に運んで、治療しながら様子をみましょう」

キールは深くうなずいた。

そして騎士っぽい人たちに指示を出して、毒を受けた男を居間に運び入れる。

あとに続きながら、エレオノーラは遠い目をした。

どう考えても面倒事に巻き込まれている予感しかなかったのだ。

こちらの好感度はマイナスです

エレオノーラはこれからどんどん熱があがるだろう患者のために、薬を錬成していた。

この家はエレオノーラひとりなら十分な広さを持っている。

玄関をあけてすぐに広がる居間は暖炉つき。

絨毯の上にソファかわりのクッションを多数置いていて、キールはそれらを抱えるのがお気に入りようだった。

ついで厨房が続き部屋にあり、向かいには錬金釜や遠心分離器などを置いた作業部屋。

そして寝室。

キールが滞在しているときは、たいてい寝室と居間をお互いに交代しながら利用している。

なので、男が急に3人も増えれば狭苦しい。

そんな空間にいたくないので、さつさと作業部屋に逃げ込んだエレオノーラであった。

某アトリエで活躍する少女たちのゲームから、エレオノーラ風にアレンジした薬を錬金釜で錬成していく。

竜の牙を乳鉢で砕き、真つ黒な茸の粉末を蒸留水で釜に流し入れる。毒々しい色合いの液体がぐつぐつと煮えたぎっているが、れっきとした体力回復薬“ポーション”を配合しているのだ。

“エリクシール”ほど劇的に回復しないが、市販のものより効果は高い。

ちなみに材料はエレオノーラが狩っている。もちろん竜もふくめて。

錬成に必要な材料には入手困難なものが多いが、それがたとえ世界の果てであろうとエレオノーラにとっては関係なかった。

そのチートすぎる魔力と魔法で目標を探索後、転移して標的に攻撃魔法一発。

「古代竜相手に“インディグネーション”ぶちかまして、まる焦げにしたのもいい思い出よねえ」

竜の大きさにびびって某大佐最大の奥義を発動させたら、一撃でノックアウトしてしまったのだ。

秘奥義パネエ。

昔を思い出しながら釜の中身を混ぜていると、やがて毒々しかった液体が透明になっていった。

エレオノーラは少しずつ魔力を液体にこめて、さらに透明度をあげていく。

完成した“ポーション”は文句なしの一品だった。

同様に材料を変えながら“解毒剤”も錬成したエレオノーラが満足しながら居間へと戻ると、止血の終わった患者とその周囲に所在なげにたたずむ騎士っぽい男2名。

我が物顔でクッションに座っているキールがいた。

患者の男はクッションを枕にして絨毯の上でぐったりしている。

動く気力がないどころか、一度も目を覚ましていない。

まずは解毒から始めたほうがいいだろう。

エレオノーラは腕の中に“解毒剤”を入れて、男の口元に持っていた。

なかなか飲みこまなかったが、時間をかけてすべて胃におさめさせる。

“ポーション”は熱が上がってきたときに飲ませればいい。
ひとまず様子見た。

そこまで処置してから寝室へ行き、使っていない毛布を持って戻った。

患者に毛布をかぶせて、エレオノーラもそばのクッションに座り込む。

「んで、自己紹介したほうがいいのかしら？」

騎士っぽい人たちに視線を向けて問うと、彼らはキールの動向をうかがうように見た。

キールは重いため息をついて彼らに目をやった。

「彼らは私の護衛だ。青い鎧のほうがサイラス。赤い鎧のほうはソル。そして・・・」

言いにくそうに患者の男のほうを向いて、うつむきながら言葉を継ぎ足した。

「彼はギルベール。幼いころからともにいた」

ええ、訳ありですなわかります。

エレオノーラはへらりと笑いながら、内心絶叫した。
なぜ偽名を使わない！

“スペクタクルズ”で視た情報と一致する名前に天を仰ぎなくなつた。

どうしてこうも厄介ごとが舞い込むのか。

この天使のような美貌のキールは、実は疫病神なのか。
確実に平凡ライフから遠のいている。

幸いなのは、彼らがまだ身分を明かしていないことだ。

まだ大丈夫。

まだ大丈夫。

大事なことなので2回呪文のように自身に言い聞かせながら、エレオノーラは自己紹介した。

「私はエレオノーラ。このあたりで医者みたいなことしてるわ」

サイラスと呼ばれたくすんだ金髪に無精ひげの生えた30代半ばの男が、値踏みするようにエレオノーラを見た。

対してソルと呼ばれた見事な赤髪の、まだ20代と思われる青年は、面白そうだという気持ちを隠そうともせずじろじろと見てくる。

不愉快である。私は珍獣ではない。

むっつりと黙り込みたくなったが、ここで反発してもいいことはない。

さすがに笑顔は浮かべられなかったので、無表情でスルーすることにした。

しかしそんなエレオノーラに頓着せずに、ソルという男は目の前にどっかりと座りこんだ。

ぎょっとして身を引くと、さらに面白そうな顔をされる。

キールがたしなめるように声を発した。

「やめないか。怯えさせてどうする」

同意するようにサイラスがうなずく。

しかしソルはその言葉に笑いながら

「蒼の森の魔女がこの程度で怯えるもんですか」と言っただ。

・・・ん？魔女とはなんぞや。

エレオノーラは凍りつきかけた思考回路を慌てて再起動させた。

この世界で魔法を使う人間は総じて魔法使い、または魔導師と呼ばれる。

比べて魔女は古い時代に、それこそあやしげな薬や術を使ったという伝説のようなおとぎ話のなかに出てくる存在だ。

その胡散臭さから蔑称として使われることもある。

以前見た真理の知識からそれらの情報を引き出すと、エレオノーラは今度こそ不機嫌さを隠せなくなった。

つまり彼は治療して欲しい患者をつれてくるだけつれてきて、医療行為を行った者に対して魔女であると見下したわけだ。

そして彼らの反応から見て、キールもサイラスもエレオノーラが魔女と呼ばれていることを知っている様子だった。

「出ていきなさい」

怒りもすぎると笑えてくる。

口元に冷笑を浮かべて、エレオノーラは再度宣言した。

「出ていきなさい。患者が治ったら町までお返しします」

その言葉と同時に彼らの周囲に転移の魔法陣を展開させる。

行き先は宿のない村ではなく、町であるだけ感謝してほしい。

キールがなにか言いかけたが、それより前に転移の術が発動した。

そしてギルベールと呼ばれた男と、エレオノーラだけが部屋に残った。

勘違い行き違い擦れ違い

エレオノーラは豆腐メンタルだ。
打たれ弱いことを自覚している。

だから他人と距離を取るし、簡単には信用しない。
信じたものに裏切られるのが怖いから。嫌いだから。悲しいから。
いまだにキールを信頼できないのも、そのあたりに原因がある。

ここまで来ると軽い人間不信である。
わかっていても、今更どうしようもなかった。
元の世界で20数年、こちらに来てからさらに10年。
もはや性格改善のできる柔らかい脳みそではない。

キールがエレオノーラが魔女と呼ばれていることを隠していたのは、
彼の思いやりからきているのだと推測できても。
最悪を想像して悲観する。だから最悪になる前に離れる。
それがエレオノーラだった。

「わかってたじゃない。私は化け物なんだから」

歳を取らないエレオノーラに対する人々の目を忘れたわけじゃない。
ただキールとすごす時間が楽しくて、記憶に蓋をしてなかったこと
にしていただけだ。

どのみち今回の訪問を最後に、エレオノーラは挨拶もなく、この地
を去ることを決めていたのだ。
むしろ離れられるいいきっかけだと思うことにした。

そつと未だ呼吸が荒い患者に目を移す。

もとは黒髪だったのだろう毛髪は、悲惨な環境に身を置いていたのか灰色にくすんでいた。

“スベクタクルズ”で栄養失調とわかっていたので、いまのうちに目を覚ましたときに食べさせるものを作っておいたほうがいいかもしれない。

そんな状態が、キールと初めて出会ったところと重なって、さらに悲しくなった。

けれど不意に外から馬のいななきが聞こえて、そういえば馬は転移させ忘れていたことに気づいた。

締まらない自分に苦笑いしながら、馬用の乾燥させた草も用意しようとエレオノーラは動き出した。

鈍い音を立ててソルが受け身も取れずに地面に叩きつけられた。

公爵当主を継ぐ予定ではなかったキールは、勉強よりも公爵騎士団に入り浸っている時間の方が長かった。

腕つぶしだけなら騎士たちと変わらない。

そのキールの不意打ちを狙った渾身の一撃は、副団長といえども防げるものではなかった。

ソルは殴られた頬の痛み顔に顔をしかめながら立ち上がった。

「キール様・・・魔女の家に戻れないからってそんな・・・いてっ」
追撃でさらに殴られた。

サイラスは息を荒げるキールの肩になだめるように手を置いて、森のほうを見やった。

強制転移させられたあと森に戻ろうとした3人だったが、どの方角から進んでも一定以上森に入ると壁のようなものにぶつかって進むことができなくなった。

時間を置いてもその壁はなくなりず、もう4日も町の宿に滞在している。

キールはエレオノーラの怒りを直接買ったソルに、何度か鉄拳をくらわせていた。

それでも気が落ち着かないのか、眉間にしわを寄せてほとんど口を開かない。

サイラスは森を見つめたまま、平坦な声音で言った。

「キール様。彼女の見立てではギルベールの容体は3日で安定します。1日は様子を見るとしても、そろそろギルベールが戻ってくる」とみていいでしょう」

キールも同じように森を見た。

「わかつている。だが、ギルベールが彼女に危害を加えていたら？ 以前の問者の件は同情の余地がある顛末だったが・・・彼の罪が消えたわけじゃない。兄上と同じように彼女まで失ってしまったら、私は・・・」

ようやく打撃の影響から立ち直ったソルが不思議そうに首をかしげた。

「なんでキール様はそんなにま・・・いや、エレオノーラ嬢のことを気に掛けるんですか」

魔女と言いかけて、またキールに鋭い視線を向けられたソルは慌てて言い直した。

キールは再び森に視線を戻してつぶやいた。

「一度地獄を見ればわかるさ」

「地獄・・・ですか？」

ソルはますますわからないという表情をしている。

5年前の火災の悲劇から戻ってきた公爵当主は、五体満足で健康そのものだった。

だからこそ、その間になにがあったかを知っているものは少ない。キールに地獄と言わせた状況を作った、反公爵派の組織の人間はギルベール以外死亡しているからだ。

キール自身もまた、当時のことを詳細に語ることはなかった。思い出したくもないというのが本音である。

そんなキールにとってエレオノーラは自身を救ってくれた恩人。地獄に唯一の光。

傷つけられることのない絶対の味方。

心からの依存が危険だと理性ではわかっていても、エレオノーラのいない人生は考えられなかった。

それに彼女に魔女と呼ばれていることを伝えなかったのには、傷つけたくないという以外に、もうひとつ別の理由があった。

この近隣の町や村で、彼女の恩恵にあずかっていない家はない。

ある男は祖父を不治の病から救ってくれたと話す。

ある女は子どもの大怪我を治してくれたと話す。

ある青年は小さいころに森で迷っていたのを助けてくれたのだと話す。

ある少女は母の病を治す薬をくれたのだと話す。

医者がさじを投げるようなことでも、彼女にかかれば安心だと皆が言う。

彼らは蔑称ではなく、親愛をこめて『蒼の森の魔女』と呼ぶのだ。その呼び名に不可思議な技法を使う者に対する恐れや畏怖がないとは言わないが、それでも彼女は受け入れられていた。

だというのに、その説明さえできないまま森の外へ放り出された。再び怒りが込み上げてきたキールは、ぎりぎり歯を食いしばった。

「ええええっ！キールったらそんなやんちゃ坊主だったの？」

「そうなんですよ」

一方エレオノーラはすっかり快復したギルベールと、まったりお茶の時間を楽しんでいた。

キールが幼いころから一緒にいたというのは事実らしく、子どもの頃の失敗談を聞いて笑っている。

今の状況をキールが見たら悔しさとむなしさで膝をつきそうな光景だが、そんなことは知らないエレオノーラは呑気に微笑んだ。

「ギルベールってほんと話し上手ねえ。こんなにいっぱいしゃべったのって久しぶり」

ギルベールは目が覚めるとすぐに状況を把握しようと、エレオノーラにあれこれ話しかけてきた。

エレオノーラは彼らの正体を知らない、ただの医者として客観的に見たままの状況説明をしながらも、彼の頭の回転の速さに驚いた。

普通は昏睡状態から目覚めてすぐに、こんな精力的に動くことはで

きない。

それが危険だとわかっていても、危機意識を瞬時に張り巡らせるには相当な頭の良さと、経験が必要なはずだ。

エレオノーラはギルベールに名字がない平民といえども、公爵当主の側つきに取り立てられるだけはあると深く納得した。

そして完全に毒が抜け、熱が下がるまでとりとめもない話をしながらすごしたのである。

そうして4日目。

エレオノーラはギルベールを町へ送る前に、お茶に誘った。

この地での最後に話す人間として、話し上手で聞き上手のギルベールを選んだのだ。

「私もこんなに楽しい時間は久しぶりでした。治療もしていただいて、どうお礼したのか」

「ああ、それは馬の世話とか任せちゃったし。病人なのに働いてくれたからいいわ」

実際、元の世界で馬になど体験実習などで数えるほどしか乗ったことのないエレオノーラには、彼らの世話などできなかった。

自分の転移魔法の不手際をギルベールに尻拭いしてもらった形になる。

ギルベールはにこやか笑ってにエレオノーラに頭を下げた。

「それでも感謝を。そして何かあればいつでもなんなんりとおっしゃってください」

それはキール経由で、ってことよね？

エレオノーラは口に出さずに困った表情をした。

もうこの地に戻ってくることはないのだ。
当然、キールとの縁もここまでになる。

けれど、それを言えば理由を問い詰められるのは目に見えていたの
で、軽くうなずいて了承したふうを装った。

「じゃあ、そろそろ町へ転移させるけど。忘れ物はない？馬以外に」
「ええ、荷物らしい荷物ありませんし。どうぞこのまま」

今度こそエレオノーラはすっかりうなずいて、ギルベールと馬3頭
の周囲に転移の魔法陣を展開させた。

目標地点はキールの周囲から少し離れた場所。
お互いに合流しやすいくらいには近い場所・・・3メートルくらい
だろうか・・・と、考えながら魔法陣に転移先を組み込んでいく。

「じゃあ、元気でね」

エレオノーラが手を振ると、ギルベールもおだやかに手を振り返し
てくれた。

「あなたも。エレオノーラさん」

そうして森の来訪者たちはすべて去って行った。

異世界でヤンデレに出会った

「ええい、うつとうしい！ “サイクロン” ！！」

エレオノーラが気合で放った超巨大暴風竜巻が、周囲の魔物を飲みこんで空のかなたへ吹っ飛ばした。

ここはエレオノーラ以外の人型の生物が住んでいないのではないかなと思われるほど、前人未到の未開の地だった。

そこでは人ではなく、魔物たちの天国とっていい。

弱肉強食。

やられる前にやれ。

今日もエレオノーラをごはんにしようと近づいてきた魔物たち相手に、攻撃魔法を放ったのであった。

あれからエレオノーラはすぐに荷物をまとめてあの森を離れ、転移につぐ転移を重ねて人のいない場所へたどり着いた。

エレオノーラの目的は次の居住地ではなく、そろそろ在庫の尽きてきた材料集めにあったので下手に人目に触れない場所の方が好都合だったのだ。

ちなみに狩ってはぎ取った材料は、某英雄王にならって別空間に仕舞ってある。

武器を入れているわけではないが、中身は竜の骨やら巨大魚の牙など物騒なものであふれかえっている。

エレオノーラは頭上を見上げて、ちょうど果物があるのを発見すると“スペクタクルズ”で分析した。

毒ではないなら食べる。毒なら材料にする。

夜は周囲に結界を張って眠りにつく。
とんでもないサバイバル生活だが、材料集めも終盤に差し掛かっていたので特に不自由は感じていなかった。

火の魔法“ファイア”で枯れ木の束に火をつけ、採った魚を焼きながらエレオノーラはまったりしていた。

人と触れ合いすぎて疲れていたエレオノーラには、今くらい孤独な方が楽だった。

とはいえ、文明人らしい生活をするには人が暮らす場所へ行って稼がねばならない。

「次はどこ行こうかなあ……。寒い地方もいいよねえ。この世界でもオーロラってあるのかな」

いや、それより風呂だ！とエレオノーラは思い直した。

この地ではせいぜい水浴びしかできないし、前にいた森でも川で汚れを落とすくらいしかできなかった。

「風呂……。いや、温泉のあるところとかいいんじゃない？ うん、そうしよう」

うきうきとしながら探索魔法“サーチ”で大地の地脈を探る。

山のあるエリアを中心に“サーチ”！ “サーチ”！ “サーチ”！！
やがて休火山のふもとに広がる街を発見した。

この未開の地から西へ数百キロは離れているが、転移の範囲内である。

それ以上の情報は現地に飛ばないとわからないだろうが、おそらく

観光客でにぎわっているに違いない。

何故なら街のあちこちから硫黄の気配がするし、人間の気配も多いのだ。

温泉か、それに近いものを目当てに人の流動があるとみていい。

「お風呂・・・温泉・・・楽しみだなあ」

うつとりしながら、エレオノーラは焼きあがった魚にかぶりついた。

偶然も必然のうちということだろうか。

なんの運命のいたずらか、温泉街で数日すごしたエレオノーラの前にはキールが立ちはだかつていた。

「え、えと。数か月・・・ぶり？」

動揺のあまりよくわからない挨拶をしてしまう。

キールはじつとエレオノーラを見つめたまま動かない。

彼はあきらかに憔悴していた。

目元にはくつきり隈が浮かびあがっているし、頬もこけている。

はちみつ色をしていた髪は若干くすんでいた。

それでも陰のある美形にしか見えないのはイケメン特典とかいうやつだろうか。

でも、らんらんと光る緑の目がコワイ。

じりじりとエレオノーラが数歩下がると、その分キールは前進した。

エレオノーラはさらに後退した。

キールは前進した。

エレオノーラはもつと後退した。

キールは前進した。

なにこれこわい。

ついに路地裏の壁にまで追い詰められたエレオノーラは、冷や汗を流しながらキールを見た。

「えれおのーら？」

かすれて拙い口調でキールが問いかけた。
反射的にうなずくと、力いっぱい抱きしめられた。

「ふぐう！？」

女らしからぬ声がもれたが、キールはおかまいなしに力を緩めることはしない。

「えれおのーらえれおのーらえれおのーら」

うわあああああああああ！

ヤンデレだあああああああああ！

エレオノーラは前の世界のアニメやらで見たキャラクターの症状を思い浮かべた。

これは懷かれてるとか好かれてるとかいうレベルじゃない。
もっと恐ろしいヤンデレだ・・・。

急にがくりとキールが膝から崩れ落ちた。

抱きしめられたままのエレオノーラも引きずられて地面に座り込む。

何が起こったのかと、キールの顔を覗き込むと目をつぶっていた。眠ったのか、気絶したのかわからないが、意識はないようだ。

しかしエレオノーラを抱きしめる力は一向に緩まる気配がない。

魔法を使えばこの戒めから逃れられるけれど、なんだかこの状況で蒸発するとさらに恐いことが起こりそうな予感がした。

ヤンデレ恐い。

とりあえずキールを逆に抱え直して、逗留地にいる宿の部屋へと転移で飛んだ。

これもひとつのハッピーエンド

宿の木枠で組んだ簡素なベッドにキールを寝かせる。

話してくれる気配がまったくないので、エレオノーラも仕方なく隣に寝転んだ。

することもないので、ぼんやりとキールの寝顔を見つめる。

くすんでいても光沢のあるはちみつ色の髪。

今は閉じていてわからないけれど、深い緑の瞳。

くせのない髪を指ですくと、さらさらと間からこぼれ落ちた。

見た目だけなら絵本の中の王子様のようだ。

ただし中身は負の感情を表に出さない見栄っ張りで、独占欲の強い大型犬。

これが10代のころなら、見た目と情熱に溶かされてすっかり恋愛関係に流されていたかもしれない。

でも年齢を重ねた今では、彼に付随するさまざまな問題が予想できて気持ちのままに走れない。

歳も離れすぎている。

こちらの世界の感覚なら、親子ほど離れているのだから犯罪ではなからうか。

シヨタはかんべんしてくれ。

ロリもシヨタも観賞するもので、手をのばしちゃイカンよ。などと、斜め上の思考で現実逃避を図る。

「どうして私なんか選んじやったの・・・」

もつと他にいい娘がより取り見取りだろうに。

自分には、こんなにやつれるほど探してくれるような価値はない。

エレオノーラはやるせなくなつて目を閉じた。

ふて寝というやつだ。

年甲斐もないと思うけれど、これ以上なにも考えなくなかった。

目が覚めると、目の前には王子様がいた。

「・・・っ」

上機嫌なキールがのぞきこんでいていた。

息をのんでエレオノーラが顔をのけぞらせると、途端に不機嫌そうになる。

「エレオノーラ」

強い口調で呼び止められて、顔を両手で固定される。

「エレオノーラ」

「は・・・はい」

返事をしないとなんか怖いほど圧迫感を感じた。

キールは満足げに笑って、頬をすり寄せてきた。

エレオノーラは完全に硬直してしまって、思考回路もマヒ寸前だった。

スキンシップ激しすぎじゃないでしょうか。
そう思っても口に出せないチキン根性。

「エレオノーラ、探したんだ。たくさん探したんだ」

ああ、やっぱり。

探してくれていたのだ。そしてこんなに疲労しているのだ。
エレオノーラはからからに乾いた唇を湿らせて、なんとか言葉を発した。

「どうして？」

どうして探してくれていたの。

どうして私なの。

どうして諦めてくれないの。

訊きたいことは山ほどあるのに、言葉にできたのは4文字の問いかけだけだった。

キールは不思議そうな表情をした後、なにか得心したふうにならずいた。

「ああ、そうか。エルにはまだ言っ てなかったね」

エレオノーラではなくエルと愛称で気軽に呼ばれるとほっとする。
心なしか圧迫感も減った気がした。

「私は君が好きなんだ」

その気軽さで、さらっと告白された。
予想していたけれど心臓に悪い告白だった。

深呼吸して気持ちを落ち着けてから、エレオノーラは諭すようにキールに言い聞かせた。

「キール。私の年齢は知ってる？」

「さあ？でも年齢は関係ないと思ってるよ。特に貴族の間じゃ歳の差のある夫婦は珍しくない」

「キール。私の職業は？」

「医者だよ。ああ、魔法使いでもあるね。魔女だなんて呼ばせないよ。君の技術は尊敬されるべきものだ」

「キール。私の姿をどう思う？出会ったところから変わらない姿を」

「黒髪黒目で、ちよつと珍しい顔立ちだよ。私の年齢に釣り合うようになって嬉しいよ」

「キール・・・私はあなたが歳をとって死んでしまっても、変わらない姿でそこにあるわ」

「ずっと側にいてくれるなら、姿かたちはなんだってかまわない」

「キール・・・」

「なに？エル」

エレオノーラのキール説得は完敗した。

泣きそうになって、慌ててきつく目を閉じ、唇をかんで堪えた。知っている人が皆死んでいく・・・置いて行かれる気持ちがなぜわからないのか。

それが精神的に弱いエレオノーラには耐えられそうもないのが、なぜ伝わらないのか。

不意にまぶたに湿った柔らかい感触がした。
驚いて目を開けると、今度は目じりに口づけられる。

「き、きーるさん？なにをしてらっしゃるの」

どもって変な口調になりながら、エレオノーラはキールから出来る限り距離をとろうと体を離れた。

しかしすぐに抱きすくめられて密着状態に戻る。

視線を上げれば、ほころぶように笑いかけられた。
カッと全身が熱くなる。

イケメンの破顔一笑は凶器だった。

ばくばく鼓動を鳴らす心臓を抑えながら、エレオノーラはキールから目を離せなかった。

「知ってる？エル。私は君から離れると死んでしまうんだ」

「・・・え」

そんな一心同体になった覚えはない。

怪訝な顔をしたのがわかったのか、キールは続けて言った。

「本当だ。今までほとんど飲まず食わず。屋敷の医者にはとうとう呆れて、さじを投げられたよ」

キールはエレオノーラの髪をそつとすいた。

「それに心が凍りついたようになって、気持ちがうつろになるんだ。これにはサイラスたちにまで呆れられたよ」

もう一度目元に唇を落として、キールは笑った。

「それでも君がいい。依存してるってわかっているけど、君以外選べないんだ。エルも呆れる？」

呆れられるわけがない。

今までの生き方を否定されて悔しくて胸が痛いのに、切なくて目がうるむ。

たった一人に求められることが、こんなに嬉しいだなんて知らなかった。

元の世界での恋愛など吹き飛んで行った。あれはこの想いに比べたら、天と地ほどの差がある。

エレオノーラも覚悟を決めなければならないと、ようやく自覚した。キールの深くてとろけるようなまなざしの緑の瞳をじっと見つめ返す。

「キール。私って実はけっこう我が侘なのよ」

「エルの我が侘なら叶えるよ」

「キール。私はさっきの条件以外にも平民で、貴族じゃないわ。でも妾は嫌なの」

「エル以外いらなから構わない」

「キール。私もわりと依存するのよ」

「むしろ依存してくれ」

「じゃあ・・・ずっと一緒にいましょう」

そうエレオノーラが言った途端、キールは今まで以上にエレオノーラをきつく抱きしめた。

魔女？いいえ錬金術師です

そのままベッドの上でお互いに抱きしめあっていたが、ふとキールがエレオノーラの顔をのぞきこんだ。

「なに？キール」

「いや、さっきは勢いで問答を繰り返したけど。よく考えたらエルって私の職業知らなかった・・・よね？妾とかなんとか言ってたけど・・・」

エレオノーラはたと動きを止めた。

そつえば“スペクタクルズ”のことを話していない。

ああ、どこまでも自分のうっかりさん。

だが、こうなったら黙っているわけにはいかないだろう。

エレオノーラは意を決して、この世界にやってきたことから始まり、自身の魔法のありえなさ“スペクタクルズ”で知った情報をキールに話した。

「　　というわけなのよ。村の人たちが魔女って呼ぶのも仕方ないくらい、私の魔法は別次元。今ある魔法理論を崩しかねないわ」

キールは難しい顔をして黙り込んだ。そしてしばらく考えた後、

「まずソルが君を傷つけたことを謝罪したい。けれど、あれは魔女という言葉で君をけなしたかったわけじゃない」

と、苦い表情で言った。

「あの森の近隣の人々が君のことを魔女と呼ぶとき、彼らは畏怖と敬意をこめていたんだから」

「うっそお？」

初耳である。

畏怖とか敬意とか、私はどこの魔王のような扱いなのか。

「うそじゃない。君が治療してきた行為は無駄じゃなかったってことだよ」

そうなのか。

エレオノーラはもつと彼らと話しておけばよかったと後悔した。そうすればこんなムナシイ勘違いをしなくて済んだはずだ。

キールはまだ眉間にしわを寄せたまま、話し続けた。

「だけど、他の人間にとってはそうじゃないかもしれない。君の魔法は奇跡を起こす。それはいい意味でも悪い意味でも人の注目を集めるだろう」

こくこくと無言でエレオノーラはうなずいた。

そんな珍獣パンダな扱いはごめんだ。

「だからもうひとつの技術で貢献してくれないか？」

「もうひとつって、錬金術のこと？」

キールは首肯した。

しかしエレオノーラからすれば、錬金術の技術もこの世界から見ればありえないレベルだ。

“ エリクシール ” など最たる例だろう。

今度はエレオノーラが難しい顔をしてうなっていると、キールが優しい手つきで頭をなでてきた。

「魔法と違って、そちらの技術ならある程度この世界の基準に合わせたものが作れるんじゃないか？」

なるほど。

“ ポーション ” や “ 解毒剤 ” のような、こちらの世界でも受け入れられるものを中心に創ればいいということか。

「それならなんとかなりそうねえ。まあ、それでもずいぶん腕のいい医者ができちゃうでしょうけど」

冗談交じりに言えば、キールも笑った。

その後、公爵夫人は魔女だという噂が一時期立ち上がったがすぐに掻き消えた。

かわりに、錬金術という新しい分野の学問を確立した才女が公爵夫人であるという話に流れていった。

その技術をもって、王国はさらに繁栄したという。

それがこの世界『デイスムーン』において、歴史上最大勢力を誇ることになるクレセント王国の礎となったのは、後の歴史家たちの言だった。

魔女？いいえ錬金術師です（後書き）

ひとまずこれで完結です。

ギルベールがどうなったのかとか、いろいろ問題は片付いていませんが、そちらは外伝に持ち越し予定になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0301y/>

魔女？いいえ錬金術師です

2011年10月29日21時06分発行